

²¹ 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。²² しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。²³ だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、²⁴ 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。²⁵ あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることになります。²⁶ まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。

²⁷ 『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。²⁸ しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。²⁹ もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。³⁰ もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。³¹ また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』と言われていています。³² しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。

³³ さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。³⁴ しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。³⁵ 地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。³⁶ あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。³⁷ だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。

主イエスにあって愛する兄弟姉妹の皆さん、

アメリカの子どもは話している時に、人差し指の上に中指をひそかに重ねるときがあります(“cross their fingers”)。その目的と考え方は、“そうすれば嘘をついてもいい。守ろうと思わないことをも約束してもいい。こうして指を重ねれば、正しいことをしなければならぬという責任から解放される。”というものです。子どもたちはある時に冗談でそうしますし、ある時に後でにこにこしながら重なっている指を相手に見せます。しかし、残念ながら、アダムとエバの子孫である人間は、大人になってからも自分の罪を正当化する方法を探しがちです。色々な賢い方法で、正しいことをしなければならぬ責任から自分自身を自由にしようとします。

イエスの時代のパリサイ人や律法学者たちは、評判の良い人でした。彼らはよく聖書を学び、いつも祈り、たくさんのルールを守り、多額の献金をささげたので、「彼らは天国へ行って当然だ」と思われていました。しかし、イエスは山の上の説教で次のように言いました。「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」イエスの時代の宗教指導者たちは社会を騙し、自分自身を欺きましたが、天におられる神は彼らの行ないに感心しませんでした。彼らの“いわゆる善行”は汚い布のようでした。彼らが善と呼んだことは、実際は悪でした。彼らは口先だけの礼拝で神に近づこうとしましたが、彼らの心は神から遠く離れていました。彼らは神の律法を破っていましたが、「私たちは律法を守っている」と主張しました。彼らは、自分自身の罪を正当化し、その罪の中を歩み続けようとしていました。神の前に立って、「主よ。私たちはあなたの律法を愛しています」と言いながら、ひそかに指を重ねる子どもの様でした。

しかしイエスは山の上の説教で、「御国の国民はパリサイ人の様であってはいけない」と告げています。イエスに属する者は、イエスご自身の義を持っています。彼らは自分の罪を悔い改め、イエスから罪の赦しを与えられます。彼らは罪の赦しに基づく平安をもって、自発的に神の戒めの中を走りたいと思っています。この世にいる間、クリスチャンは天国への道を歩みながら、神の律法を心に留めます。今日の箇所、イエスは第5、第6、そして第2の戒めを詳しく説明しました。

パート1: 第5の戒めの説明

イエスはまず第5の戒めを説明しました。その理由は、「私は第5の戒めを守っている。私は人殺しではない」と多くの人が主張しているからかもしれません。イエスは「²¹ 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。²² しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き

渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」と教えました。イエスがこの世に来られたのは、神の律法を破るためではありません。むしろ、神の律法を成就するためでした。この言葉で、イエスは神の律法の意味を変えたり、神の律法に新しい内容を加えたりしていません。むしろ、モーセによって与えられた神の律法の本当の意味を明らかにしています。第5の戒めは、裁判で行われる正義についてではなく、神の御前に立つ人間の心について教えています。第5の戒めが禁じている罪は、人殺しだけでなく、罪に満ちた怒り、憎しみ、他人を傷つける言葉をも含みます。人が隣人に痛みや悲しみを加える時、それは第5の戒めを破ったことになるのです。虐めと暴言は、神の第5の戒めを破る罪なのです。山の上でのイエスの説教を聞いたヨハネは、数十年後にこのように言いました。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです」（第1ヨハネの手紙3章15節）。

イエスは続けて第5の戒めに関する事例を挙げました。「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、²⁴ 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」旧約時代の礼拝では、捧げものや生贄（いけにえ）が大切でした。神がこの礼拝を命令したのは、罪の深刻さと救い主の必要性を旧約時代の人々に思い起こさせるためでした。一方、私たち新約時代の礼拝には、そのような捧げものを捧げなくても良いのです。なぜなら、人間の罪を完璧に、そして完全に償う生贄であるイエスがすでに来られたからです。神は私たちの礼拝で、御言葉と聖餐式によって、「私の子（イエス）は完全にあなたの救いを成し遂げた」と保証してくださっています。

私たちの礼拝形式が旧約時代の形式と違っていても、イエスが挙げた事例は私たちにとっても意味深いです。イエスの福音を聞き、神の御名を賛美するために神の家（教会）へ来るとき、誰かに対して罪を犯したことを思い出すなら、私たちはその問題解決を優先して、ぐずぐずしないでその人と話し、「私は神とあなたに罪を犯した」と告白して、罪の赦しを願うべきです。そうすることで、私たちは第5の戒めを心に留め、実践にすることができます。

「あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。²⁶ まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。」イエスの御国の国民は、神の律法を愛するので、他人に対して恨みを抱いたり、頑固に悔い改めないまま日々を過ごしたりしたくないのです。彼らは終わりの日にキリストの前に立たなければならないことを意識しています。ですから、彼らはプライドを捨て、互いに自分自身の罪を告白し、相手から罪の赦しを願います。その時、その人が私たちの罪を赦すのを拒んだら、それは私たちの問題ではありません。正しいことを行った私たちは、真心からの祈りをもってすべてのことを主に委ねましょう。

パート2: 第6の戒めの説明

次にイエスは、第6の戒めを説明しました。「『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。²⁸ しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。²⁹ もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。³⁰ もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。」イエスは第6の戒めの本当の意味を明らかにしました。姦淫には、すべての情欲、下品な言葉、清くない行為が含まれています。もともとの問題は、私たちの体ではなく、私たちの心です。たとえ目をえぐり出すし、手を切って捨てても、もともとの問題を解決しないのです。悪い思い、言葉、行いは、腐敗している心から出てくるからです。イエスの御国の国民は、神の御前に立つとき、まるで十の戒めを守っているかのように、良い人のふりをしません。むしろ、自分の罪深さを認めながら、傷のない神の小羊（イエス）に希望を置き、「私の心を清め、私たちが言葉や行いによって清い生活を送るようにしてください」と祈ります。

小教理問答書が教えているように、神は第6の戒めによって結婚という素晴らしい賜物を守ってくださっています。神の律法は離婚を禁じていますが、罪深い人間の心をご存知の神は、夫婦のどちらかが不貞をした場合、「もう一方に離婚を要求する権利がある」と言われました。しかし、イエスの時代の宗教指導者たちは、色々な方法によって離婚を正当化していました。そして、「私たちが認めた方法に従うなら、離婚は正しい」と主張しました。しかし神の御子であるイエス・キリストは、「また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』とされています。³² しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」と言いました。人間の罪のせいで、この世には完璧な結婚はありません。夫たちは愛や思いやりをもって妻を愛さないことがあります。妻たちも、尊敬する気持ちをもって夫を支えないことがあります。どの夫婦であっても、夫と妻は互いに自分自身の罪を告白し、神の助けを求めて祈らなければなりません。クリスチャンの夫婦は、相手とのコミュニケーションを持ち、相手に仕えるよう励みたいと思います。そうすることによって神が定めた結婚を尊び、第6の戒めを心に留めることができます。「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」（マタイの福音書19章6節）。

しかし、誰かが不貞以外の理由で離婚するときに、配偶者と神に罪を犯すこととなります。そして、配偶者を姦

淫した人のように見せ、後でその人が再婚する場合、再婚相手に良くない評判を与えるかもしれません。イエスの御国の国民は、第6の戒めを心の留めながら、身勝手な離婚の罪とそれに伴う辛い結果を避けたいと思います。ですから自分の罪を正当化しないで、悔い改め、罪の赦しを神に願うのです。

パート3: 第2の戒めの説明

イエスの時代の宗教指導者たちは、非常に悪賢い人たちでした。彼らは色々な種類の誓いを考え出しました。ある誓いはそんなに厳しくないものでした。しかし、イエスは以下のように言います。「さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』とされていたのを、あなたがたは聞いています。³⁴しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。³⁵地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。³⁶あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。³⁷だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです(悪い者から来る)。」

人間が誓う理由を考えてみましょう。それは、人間の言葉が信頼できないからではないでしょうか。人間は誓う時に、「今回、私は真理を語ります」と言うでしょう。しかし、多くの人は、嘘を付きながら、「私は真理を語っている」と誓います。そのような人々は、「神が私の証人となり、私が嘘を付くなら私を罰して下さい」と願っています。そのような嘘の誓いをする人は少なくないです。その人々は神を愛しても、恐れてもいません。

しかし、神の御国の国民である私たちは、偽りの父と呼ばれる悪魔から解放されています。私たちは悪魔の言葉を使って語りたくありません。むしろ、神の子どもとして、神の真理の光の中を歩み、愛をもって互いに真理を語りしたいと思います。わたしたちは第2の戒めを心に留め、いつも正直に話しながら、日常生活のすべての言葉によって神に栄光を表したいと思えます。誘惑に負けて嘘を付いてしまった時、私たちはできるだけ早く山の上の説教をした神の御子(イエス)のもとに走りたいと思えます。イエスは、義について説教しただけでなく、義を成し遂げ、私たちのために義となった主ご自身です。罪を犯した時私たちは、救い主イエスに近づき、父なる神の御前で私たちのとりなしをしてくださるようお願い。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」(第1ペテロの手紙2章2節)。「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。」(ガラテヤ人への手紙3章13節)。

イエスのゆえに、またイエスへの信仰によって、私たちは永遠の御国の国民であり、またその国民として歩み続けることができます。イエスが教えてくださったように、神の律法を学び、思い巡らし、素直に心に留めましょう。アーメン。